

第2回「新しい時代の在り方検討委員会」会議録①

【 国府・板野支援学校の在籍者数予測について 】

委員長

皆さん、こんにちは。私は今、徳島文理大学でおります。皆様も御存じのとおり、徳島文理大学では、今月はじめに新型コロナウイルスに感染した学生が、残念ながら1名出ました。その後、関係者にPCR検査を実施したところ、全員陰性でした。2週間が経過したので大丈夫ということですが、念のためテレビ会議での参加とさせていただきます。

先ほど教育次長さんから御挨拶をいただきましたように、新しい時代の特別支援学校の教育内容について、本日は具体的な御提案をいただけたらと思いますのでよろしくお願いいたします。

それではまず最初に、前回の委員会におきまして、私どもの方から委員にお願いをしておりました、国府支援学校、板野支援学校の在籍者数の予測について、御説明をいただければと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

委員

前回いただきました宿題の結果がある程度出ましたので、御報告、御説明いたします。

前回の委員会において、予測にあたっては3つの時期がポイントになるとお話ししました。1つ目は小学部の入学時、2つ目が中学部の入学時、そして3つ目が高等部の入学時です。この3つの時期で、児童生徒数がこれまでどのように推移してきたのかをまず見ておきたいと思います。

まず、小学部入学時についてです。板野・国府の特別支援学校とその通学範囲の小学校1年生の数を平成20年から見てみますと、小学校1年生の数は、少子化の影響により、右肩下がりに徐々に減ってきています。次に、特別支援学級の知的障がいと情緒障がいの児童の数ですが、右肩上がりで増えてきています。特にここ3年で急激に増加しています。一方、特別支援学校の小学部1年生の児童数は一旦減りますが、その後また増えて、再び減ってまた増えるという動きを繰り返しながら階段状に増えてきています。この階段状に増えてきているということをどう解釈するかについては、前回の委員の皆さんのお話の中で特別支援学校の教室が満杯であるというような、受け入れ側の環境の悪化が、保護者の選択に影響を与えているのではないかと、また、特別支援学校を選択することを躊躇させているのかもしれない、というような意見がありました。そのことが少なからず影響し、このような階段状の増加の傾向になってきているということではないかと思えます。

次に、中学部入学時についてです。板野・国府の特別支援学校の小学部6年生と中学部1年生の数、それから支援学級の児童数について、その推移を同じく平成20年から見てみますと、特別支援学校の小学部6年生の数は減ったり増えたりを繰り返しながら、結果的には令和元年は10年前の平成20年の人数とほとんど変わりません。一方、中学部1年生の数は、途中波はありますが、平成26年まではずっと増え続け、その後、横ばい状態になっています。それから、特別支援学校の中学部1年生の数は、持ち上がりで進学してくる小学部6年生の数を上回っています。新たに特別支援学級などから特別支援学校へ入学してくる生徒の割合はどのくらいだろうか、と平成20年から見ると、最初の頃は30%台だったものが今は50%台です。5割を超えるようになってきているということです。このように、特別支援学校の中学部には小学部から引き続いて入学する児童のほかに、地域の特別支援学級から新たに入学して来る生徒も多くなってきているということです。ただし、中学部1年生の数がこのところ横這いで推移しているのは、もしかすると特別支援学校の教室が満杯であるというような受け入れ環境の悪化が、特別支援学級からの転入を抑える要因になっているかもしれません。そのような傾向があるのではないかと読み取れます。

次に、高等部入学時についてです。板野・国府の特別支援学校の中学部3年生と高等部1年生の数を、平成21年から見たものです。特別支援学校の中学部3年生の数は一旦減ります。その後増え始め、再び減るといような動きを繰り返しながら階段状にずっと増えてきます。平成28年まで増加しましたが、その後は減少ないし横ばいで推移しています。一方、高等部1年生の数は、途中波はあるものの、平成26年までは増加し、その後は減少ないし横ばい傾向にあります。高等学校には、特別支援学級がないために、中学校の特別支援学級などから特別支援学校の高等部へ入学してくる生徒が見られません。そのため、特別支援学校の高等部1年生の数は、持ち上がりで進学してくる中学部3年生の数を上回ります。特別支援学校の高等部1年生に占める特別支援学級などから入学してくる中学3年生の割合については、平成26年頃から5割を下回るような傾向が見られてきています。どうも平成26年というのは、何かトピックス的な時期なのかということですが、実は平成26年は、板野と国府を合わせた児童生徒数がそれまで急激に増えていたのがここでストップする時期なのです。このことから、やはり特別支援学校の教室が満杯であるというような、受け入れ環境の悪化が保護者を躊躇させ、特別支援学級からの転入を抑える要因になっているのではないかとこの感じがしました。

それでは、これらのことを理解した上で、今後の板野・国府支援学校の在籍者の将来予測についてです。前回の委員会で、予測はある程度幅を持って出した方がいいのではないかと私から提案しました。それで、3つのケースを想定し、予測をしてみました。

1つ目のケースは、直近5年間の児童生徒数の変化率の平均値を用いて将来値を予測しました。この方法は一般的に使われており、文科省でもよく使われています。

2つ目のケースは、直近5年間の増加率の最大値を用いて将来値を予測しました。これは、当時の施設容量で最大どこまで受け入れ可能だったかということを反映させて、将来を予測したものです。

それから最後に3つ目のケースですが、直近5年間の変化率の平均値に加え、そこに「潜在需要」を考慮して将来値を予測しました。先ほど御説明しましたとおり、平成26年までずっと増加してきたものが、平成26年を境に伸びが落ち着き、横ばいになったという傾向を、どうにか反映させられないだろうかということを出したものです。この「潜在需要」についてですが、平成19年から板野支援学校で知的障がいの児童生徒を受け入れるようになって、同じ通学範囲にある国府支援学校の児童生徒数は減らずにむしろ増えたということがあります。その増加は平成26年までで、止まったのが平成27年ですので、平成19年から26年までの8年間の増加数を、「潜在需要」と見ていいのではないかと判断しました。この「潜在需要」を具体的にどう加味するかというと、平成19年までの8年間と、平成19年から26年までの8年間を比較し、その比率を「潜在需要値」として用いました。

それで、これらの3つの予測ケースについてですが、いずれも将来の令和9年頃から減少します。これは少子化の影響が著しくなるからなのですが、2つ目の増加率の最大値を用いた予測ケースと3つ目の増加率の平均値に「潜在需要」を考慮した予測ケースはよく似た増加傾向を示します。これからわかることは、増加率の最大値を用いることが潜在需要が顕在化した状態をひょっとしたら表していることになっているのかな、ということです。また、2つ目と3つ目の予測ケースでは、令和3年から急激に増えるようになっていますが、これは現在の施設の容量を無視しているからです。施設が新たに整備された場合は、平成19年から平成26年までに起きたような増加が現れるというように理解してください。つまり、施設が新たに整備された時点で、「潜在需要」がこのように急激に顕在化して増えていくのではないかとこのように考えてください。

結論になりますが、3つの予測ケースをそれぞれ勘案してみますと、将来必要となる施設の容量は、現在よりも最低で58人分、最大で171人分必要であるという予測結果になりました。

以上です。

委員長

ありがとうございました。

非常に興味深く聞かせていただきました。在籍者数の予測につきまして、これまでの特別支援学校の状況をしっかりと踏まえた上で、3つのケースで御報告をしてくださいました。その中には、「特別支援学校がいつごろから複数の障がい部門を設けたか」というようなことや、「特別支援学級の児童生徒が、どのように進路を選択するか」などの要素についても考慮してくださいました。

これから、ただ今の御発表について御意見・御質問などを承りたいと思います。テレビ会議という関係で、委員の皆様細かい状況が把握できませんので、ここからの司会進行は副委員長さんにお任せしたいと思います。誠に申し訳ないのですが、副委員長さん、よろしく願いいたします。

副委員長

はい、分かりました。

それでは、ここからは、私の方で司会進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

ただいま説明がありました。在籍者数の予測についてですが、委員の皆様から何か御質問とか御意見がありましたら頂戴したいと思います。いかがでしょうか？

前回の会議でも「潜在的な需要の人数がある」という御意見がありましたけれども、今日の御説明をお聞きしまして、その数字が明らかになってきたような感じがしております。

それと、特別支援学校の現在の受け入れ体制が、保護者の方の学校選択においても影響しているということについても、御説明からわかったのではないかと思います。いかがでしょうか。

御意見はありますか？

また、何かお気づきの点がありましたら、最後のところでも結構ですので、忌憚のない御意見をいただければと思います。大変貴重なデータだと思いますので、これを参考に整備計画を御検討いただければ非常にありがたいと思います。

事務局

ありがとうございました。

この度、委員の専門的な見地からの予測データをいただきまして、本当に感謝申し上げます。

今、御説明をいただきました内容につきましては、在り方検討委員会からの重要な参考データの御提供、御提案ということとして受け止めさせていただきます。県としても、これからいろいろな方向性を考えて整備を進めて参りますが、その方向性を定めるにあたっての、大変貴重な参考意見として受け止めさせていただきたいと考えております。本当に貴重な御意見をありがとうございました。

また、この後、委員の皆様からこの件についても御意見があると思いますので、その御意見もあわせて、方向性を定める参考資料とさせていただきたいと考えております。

以上です。

第2回「新しい時代の在り方検討委員会」会議録②

【 各議題についての協議・意見交換 】

副委員長

ただいま、事務局からの説明の中で、私ども委員に対して「問いかけ」がいくつかありました。本日は、これらの点について話し合っていきたいと思っております。

まず、資料の4ページ、スライド番号7です。「地域の方に知ってもらような活動が必要ではないか」また「現在取り組んでいるけれども、もっとほかの良いアイデアはないか」とのことです。

この点について、先ほど紹介のありました県外の特別支援学校の教育活動も参考にいただきながら、皆様の忌憚のない御質問また御意見をいただければと思っております。それでは何か御意見、御質問ございませんでしょうか。

何でも結構です。

委員

私の子供が通っている学校では、農作業で、いろいろなものを栽培しています。時期に限られるとは思いますが、出来上がった生産物を地域のスーパーだけではなくて、少し離れた地域で「〇〇学校の生徒生産物」といった形で販売してみることも地域の方々に広く知っていただく活動になるのではないかと思います。

すでに行っている活動などもあるため、それ以上広げるっていうアイデアが今は思いつかなかったので、お話したように、例えば県内特別支援学校がそれぞれの活動地域を交換したり、収穫・販売される時期が異なるものをお互いに交換したりする取り組み方もあるように思いました。

副委員長

ありがとうございました。

各特別支援学校の商品やその販売を通して地域の方と繋がっていく、また、場所を変えることによって、新たな地域との繋がりへと広がりができるといった、非常に良い御意見だと思います。

ほかにごございませんでしょうか。

各特別支援学校の取組や活動を知ってもらうためには、戦略的に、様々な情報を発信することが大事になってくるかと思えます。そういう細かい積み重ねが広がることで、やはり地域の中で必要とされる学校にもつながっていくのではないかというふうに思えます。

いかがでしょうか。

委員

先ほど事務局説明の中にもありましたが、作業学習で作っております植栽の活動を生かして、近くの企業へ花を植えに行ったり、花を道の駅まで持って行ったりしている特別支援学校もあります。また、技術的な点で申し上げますと、技能検定等も行っていますが、その清掃技術を生かして学校の周辺を清掃するなど、いろいろな点で地域に向けた貢献活動を行っております。特別支援学校が行っている地域に向けた取組例として挙げさせていただきました。以上です。

副委員長

はい、ありがとうございます。

本当にそうですね。地域の中で、学校と地域が支え合っていくという関係作りが、やはり大事ではないかなという思いはあります。そういう意味でも、地域に貢献する活動を行うことは非常に有効かと思えます。

ほか、いかがでしょうか。

現在、キョーエイの方で「はっぴいエコプラザ」の活動をされていますが、そういう中で何かお気づきのことはございませんでしょうか。

委員

「はっぴいエコプラザ」は、いわゆる就業体験という形で、仕事の経験をするようになっております。今後もっと地域に向けた活動ということで考えると、私どもの会社でも今、食のSPA化を進めておまして、自社商品いわゆるプライベートブランド商品のようなものを開発し、販売するといったことを進めています。それを特別支援学校と一緒に試してみたいというのも面白い取組かなとは思っています。自分たちで作った商品を私どもの店で実際に販売し、販売を手伝っていただくことによって、自分で作った商品をお客様に買っていただくという体験ができます。ただ作るだけでなく、それを消費していただくお客様に説明をして買っていただくことは、就業体験だけでなく、実際に働いたらその対価としてお金をいただける経験にもつながるなど、すごく大事なことではないかと思えます。

それと、安定した供給は難しいと思いますが、私どもは現在フードバンクの事業も行っており、何店舗か実施しております。店の方で少し箱が傷んだ商品とかお客様にも提供していただくようなものもあるのですが、そういった商品を使って特別支援学校で何かの商品を作って販売したり、子供食堂とかへ提供して食べていただいたりするような活動も面白いのではないかと感じております。

それで今後は、就業体験とか体験するだけでなく、やはり社会に向けて、社会に就職していくための活動というものができていけたらいいのではないかなと考えております。以上です。

副委員長

はい、ありがとうございました。

体験するだけではなくて、先ほどの販売についても、「接客して売る」、「それでお金をもらう」といった活動は、「社会のシステム」についての理解や「自分が作ったものが売れたという充実感、満足感」などは「良い社会活動」、「社会の仕組み」を理解する上でも良い機会につながるというふうに思います。ありがとうございます。

ほか、いかがでしょうか。

委員

「とくしま特別支援学校技能検定」のリーフレットを拝見しまして、福祉の分野においても、同じような取組を行っています。教育と福祉が連携して就労支援につなげていくことができたらと考えます。

また、徳島県の特別支援学校における教育活動の中で、「学校から地域に向けた活動」とありますように、国府和太鼓クラブには、イベントに御出演していただいています。農業体験として、特別支援学校の生徒さんと一緒に収穫体験を行っています。このような取組を続けていくことが、地域との関わりを生んでいくと思います。

最後に、地域貢献について御紹介させていただきます。

近隣の高齢者施設等を訪問し、異世代間交流、また、特別支援学校との共同防災訓練を行っています。施設のお祭りや防災訓練に地域の方に参加いただき、町内会の清掃活動へ参加し、地域との交流を図っているところです。

今後も地域、施設、また特別支援学校と地域に向けた取組をを続けていくことができればと思っております。

副委員長

はい、ありがとうございました。

ただいま、施設中でのいろいろな取組の紹介がありました。今後、是非取組を進めていただければと思っております。

では、ほかの御意見をお聞きしたいところですが、時間の都合もありますので、次に進めさせていただきたいと思います。

次に、スライド8のところ。「地域の方がどんどん学校を訪れる活動が必要ではないか」ということですが、現在はこのような取組がまだ少ないというような御報告でした。逆に考えれば、これから新たにできることがあるということにもつながるかと思えます。事務局からは、「何をどのように増やすべきか」という問いかけですが、この点について、皆様からの御意見をお伺いしたいと思います。

何か御意見や御質問等がございますでしょうか。

委員

先ほどの話にもあったのですが、子供たちが園芸で農作物を育てています。行事の時には地域の方が購入してくださっているのですが、普段は校内で保護者や職員への販売のみです。定期的に地域の方に販売することはありません。学校に「コミュニティ・ショップ」などがあれば、学校で作った農作物やエコ作品、そのほかにも、児童生徒の作品を販売することもできると思います。

また、「とくしま特別支援学校技能検定」に向けて生徒が日々練習を行っています。校内に「コミュニティ・ショップ」などがあれば、児童生徒が学んだことを発揮できる機会や場所にもなり、地域の方にも児童生徒が行っている取り組みを知ってもらえる機会にもなると思います。

副委員長

はい。ありがとうございます。

「コミュニティ・ショップ」、いいですね。地域の方が来てくださる取組にもつながっていくと思います。学校の活動の中にどんどん地域の方を巻き込んでいくことは、大変大事になってくるのではないかと思います。

ほかはいかがでしょうか。

委員

池田支援学校美馬分校の「みまカフェ」に関する情報なのですが、「みまカフェ」は、私が勤務していた頃は週に1回開店しておりました。定期的の開店することが非常に大切で、定期的の開店するから地域の方が来てくださいます。来客数は、1年間に合計1,000人を超えています。「みまカフェ」にはいろいろな機能がありまして、保護者にとっては参観日になります。中学部や小学部、特別支援学級の児童生徒にとっては、校外学習として来てくださることもあります。それから、「他団体の集まりの場」、「軽い遠足」などとして、地元の方や、教職員が来られたりすることもありました。

「みまカフェ」のような場が学校にあったら、いろいろな方が学校を訪れ、賑やかで、活気のある学校づくりができるのだなということを実感しながら当時は取り組みました。

以上、情報だけです。

副委員長

はい。ありがとうございます。

地域の方も来られて、年間来客数が1,000人というのは、すごいですね。そういう「カフェ」を通じて地域の方とつながり、そのつながりがまた活動を広げていくためのいいきっかけづくりもなるというふうに思います。非常に良い活動だと思います。是非、その辺の機能についても少し検討いただければということの御意見だったかと思います。

ほか、いかがでしょうか。どんなことでも結構です。

委員

先ほどの方と同じような意見になります。私の子供が在籍していた時もそうでしたが、園芸で取れたものの販売を行っています。保護者は日頃から学校に行ったりするので買えますが、外部の人はなかなか買う機会がありません。学校祭では農作物をかなり出しますが、その時は、地域の方がすぐに買って行かれてすぐに売り切れになります。地域の方がすぐ買ってくれているので、農作物の販売が毎月でなくても、2ヶ月に1回でもあればいいなと思います。先ほど中内委員がおっしゃったような、「定期的に販売がある」、「人気があるものが販売されている」となれば、地域の方も来てもらえるのではないかと思います。その中で、販売する場所に、パネルなどの少し学校の紹介的なものを飾ってもらえたら、学校で何をしているか知っていただける機会にもなると思います。

私の子供は阿南支援学校に通っていたのですが、阿南支援学校は、坂を登った坂の上にあります。学校がなかなか見えないので、地域の方にしてみれば、学校の中で何をしているかわからないってところもあると思いますので、やはり学校を見てもらうためには、坂を登ってもらう必要があります。人気のある農作物や木工作品を置いておいて、地域の人に買いに来てもらったら、学校の様子や取組を知っていただくことができると思います。農作物以外にも、学校紹介パネルを見て、「この子はこういう学習や活動をしているんだな」とか、「こういう作業や仕事をしているんだな」と分かってもらえるとと思います。

単に物を買いに来ただけでなく、特別支援学校の子供たちが校内で何をしているのかを見てもらうためには、今、生徒が取り組んでいる作品であったり、生徒たちが作った何らかの商品を販売することはいいのかなと思います。

副委員長

そうですね、売ることを通して、学校の良さや取組を地域の方に知っていただく良い機会になるかと思います。ほかよろしいでしょうか。

それでは、ちょっと時間の都合もありますので、次を進めさせていただきたいと思います。また後で、何かお気づきのことありましたらお話ししていただければと思います。

それでは、ページで言えば5ページの、スライド9になります。「新たな地域との関わりを育てるべきではないか」ということです。「『地域の課題を解決する活動』、また『年齢や障がい特性に応じた活動』をするにはどういったものが考えられるのだろうか」という問いかけであったように思います。

この点について、委員の皆様から御質問、御意見がありましたらいただきたいと思います。よろしく申し上げます。

委員

先ほど「コミュニティ・ショップ」とか「コミュニティ・カフェ」というお話が出ていたと思いますけれども、私の方では、実店舗にプラス「オンラインショップ」も加えていただけたらなと思っています。なぜなら、オンラインショップというサービスを増やすことによって関わる人が非常に増えてくる可能性があるからです。

例えば、実店舗でしたら、先ほどありましたように「販売」とか「流通」とかそういう「社会のシステム」を学ぶことができるということがありましたけれども、「オンライン」というものを持つことによって、例えば、「オンラインの仕組み」であるとか「ウェブサイトのこと」であったりということも学ぶことができます。

また、関わる人が増えるという点でしたら、実際店に立って販売できない方でも、オンラインショップで商品を自分で選び、写真を撮り、レビューを書いて人に見せることでそれを買ってもらえるという喜びを感じることができるようになります。

より多くの人に関わる可能性があると思いますので、実店舗プラス、オンラインショップということも考えていただけると可能性が広がるのではないかと思います。

副委員長

今のコロナ禍に対応した1つの良い販売方法だと思います。私どもでも、これまで、マルシェとか大規模なイベントを通して商品の販売をずっと行ってきましたが、今回、コロナの感染拡大に伴って、そういうのがほぼ全てストップしてしまい、なかなか販路開拓に苦労しているところがあります。そういう点からも、これからは、こういうオンラインショップというのが非常に有効な活動であり手法になってくるのではないかというふうに思います。また、そういう中で、いろいろな生徒が学ぶ機会も増えるのではないかということの御意見だったと思います。どうもありがとうございます。

ほか、いかがでしょうか。

委員

今、「オンラインショップ」という話もあり、事務局からの説明にもある「テレワーク」という、非常に注目されている技術とか働き方についてですが、私自身も車椅子なので、やはり就職する際に、前提として段差がない、階段がない、環境が整っている、障がい者用のトイレがあるといった会社をまず選びます。でもそう考えていくと、なかなか働く場所がなく、徳島は非常に少ない感じがします。この「テレワーク」という技術で、本当に新しい働く場所が出てくるのではないかなと、すごく期待しています。積極的に「テレワーク」の体験や「テレワーク」の活用を教育の中に取り入れていただきたいと思います。提案ではないですが、私の意見を言わせてもらいました。

副委員長

はい。ありがとうございます。

本当にそうですね。「テレワーク」については、障がい者の仕事の幅を広げるという意味でも非常に有効かと思えます。その辺の体験も含めて、取り入れていただきたいとの御意見だったかと思えます。

ほか、いかがでしょうか。

委員長

「オンラインショップ」、「テレワーク」という貴重な御意見が出ました。先進的な御意見を頂いて「心強いな」、「素晴らしいな」と思いました。と言いますのは、事務局の説明スライドでは、「できるだけ特別支援学校に来ていただく」となっています。特別支援学校に来ていただいて、子供たちの活動を見ていただくという趣旨です。これはこれで良いと思うのですが、そこにプラスアルファして「オンラインショップ」ということで、来ていただかなくても特別支援学校の活動に関心を持っていただくということですね。ここでは、子供たちも「オンラインショップ」の活動を通していろいろなことを学んでいくという非常に素晴らしい御提案をいただいたかなと思っています。

スライド9の一番下に「地域の課題を解決するような活動」というものがありまして、どういうふうにしていけば良いのかと考えております。これについては、1回目の在り方検討委員会でも、「地域と特別支援学校がどのようにつながりを作っていくか」という御意見も出ておりました。

私が以前に勤めておりました徳島視覚支援学校と徳島聴覚支援学校が4階建ての建物に改築されました。その時に、地域の方々と話をする中で、「せっかく4階建ての建物ができただから、災害時には徳島視覚支援学校、徳島聴覚支援学校に避難させてもらえないだろうか」という声が地域の町内会から上がってきました。町内会、それと、地域の消防団、婦人会などのいろいろな団体が学校に来られました。「徳島視覚支援学校、徳島聴覚支援学校の学生さんと一緒に、防災訓練を1泊2日でさせてもらえないだろうか」という依頼があり、「学校での炊き出し」から、「体育館に段ボールでついたてを作って寝る」といったこともさせてほしいとのことでした。

特別支援学校は、県内のいろいろな地域にあります。各地域は、それぞれに「防災」が1つの大きな課題となっております。各特別支援学校が、地域の防災拠点になりうるのではないかと考えます。特別支援学校の中には、宿泊ができる寄宿舎がある学校もあります。また、ユニバーサルデザインにのっとった施設になっておりますので、特別支援学校が地域の防災拠点となることができると考えております。

以上です。

副委員長

委員長，ありがとうございます。

特別支援学校が防災拠点になるという御提案をいただきました。特別支援学校を，地域の方や施設の方に御活用いただく，また，解放していくということも地域との関わりを深める上で一つの大切なことかと思えます。

委員長ありがとうございました。

それでは，時間の関係上走って大変恐縮なのですが，次に移ります。ページで言いましたら5ページのスライド10のところ。「新しい時代に応じた職業内容」また「個々に応じた進路選択ができる体制づくり」に関する問いかけでございます。また，「重度の障がいのある生徒たちも職業自立につなげるためには，どういう活動や教育内容が考えられるか」というようなことです。この点について皆様からの御意見を伺いたいと思えます。

御意見いかがでしょうか。

委員

私は，これからの教育内容につきまして，調理の授業を大規模に取り入れることを強くお勧めいたします。理由としましては，食べ物を作るということは，どのような時も需要があり就職につながりますし，食べるということのは，生きることにつながりますので，自分や家族の食べるものを作ることもできるようになります。また，調理の工程の中には色々な作業がありますので，重度の生徒さんから軽度の生徒さんまで全ての方に特性に応じた作業があります。そして，地域の交流拠点にもつながります。

具体的な内容としまして，特別支援学校の中にカフェレストランを併設する調理施設を作ることを御提案いたします。授業の一環として，調理に関わる基本的な衛生面のことから，調理作業，商品管理，販売，接客まで幅広い活動を行うことができますし，先ほどの話にありましたように，実店舗プラスオンラインショップとしてはいかがでしょうか。そして，ショップでは，食べ物以外のいろんな作品等も販売したり，作業の依頼も受け付けるなどしたりしてはいかがでしょうか。

地域に開かれたカフェレストランは，1ヶ月に何回というのではなく，毎日でもいいくらいなんですけれども，「決まった日時に」，「毎日だったら時間を決めて」週に何回も開いていて，いつでも地域の方が来られるような拠点にすることが良いと思えます。また，メニューも徳島ならではのメニューや，その地域の学校との連携，例えば，城西高校と連携して地産の野菜を使ったメニューにするなど，共同開発をして販売してはどうでしょうか。学校の調理施設で経験を積んで，地域の飲食店や就労施設の事業所へ体験に行つて，将来の就職につながっていったらいいと思えます。

授業では、地域の人材やプロの講師を呼んで、作業の指導にあたっていただくという形で地域の食材と人材を活用していったらいいと思います。店舗を併設することによって地域に愛されて、地域に必要とされる学校、開かれた学校になり、卒業後も必要とされる人間、人を育てることができると思います。

いろいろな課題が解決される1つの提案であり、卒業後の経済的自立につながると考えます。

以上です。

副委員長

はい。ありがとうございました。

地域に開かれた施設にするためにも、カフェレストランみたいなものを定期的に開催して、作る上でも地域のプロや専門家を人材活用しながら授業をされれば非常に良いのではないかなという御意見であったように思います。

スライド10の中にある「新たな作業内容」についても、こういう食品関係の内容がちょっと入ってもいいかなというふうに思いますので、今の御提案にもありましたように、是非、お菓子やパンとか、カフェで売れるようなものも作業内容に含めていただければ、生徒さんの将来の仕事の幅が非常に広がっていくのかなと思います。

ほかはいかがでしょうか。

はい、よろしく申し上げます。

委員

障がい者スポーツ、芸術に関する情報提供です。

「徳島県障がい者スポーツ協会」では、ストレッチ動画などを配信しています。

また、「徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター」についても、ホームページ等で情報発信をしていますので、ご覧ください。

委員

就職される企業の方の声を、少しここでお話しします。

スライド10とスライド11に絡むことなのですが、大変嬉しいというか、力強い言葉をいただいていると思います。その中で、こういったオンラインで生徒さんが社会で活動したり、また今おっしゃってくれたようなスポーツ分野での活動、活躍したりするためには、どうやら特別支援学校に専門学科みたいなものが必要なのかなって、ちょっと今思い浮かんだんですけど、いかがでしょうか。

私は元々、卒業生を受け入れる立場にありますもので、私どものメンバーにいるいろいろな事業所さんの中で、「職域の拡大」というのはこの後必ず出てくると思うんです。そうですね。この「職域の拡大」については、今

どうやら皆様にヒントをいただいているように思います。その中で思い切って逆に今までなかったような「専門学科」を作っていくって、本人にプロ意識まで持っていくような自信を与えてしまうんです。もちろん、そのためには指導者とかプロのコーチさんとか、今おっしゃったようにたくさんのマンパワーが必要になってくると思うのですが、そんな学科を作ることができるのかなと思ひまして。大学とか体育学校とかだとあるんでしょうけど、今ちょっと浮かびましたので、一応この場で発表させていただきました。

副委員長

ありがとうございます。

専門学科が必要ではないかという御提案がございました。

すみませんが、具体的に言うと、どのような専門学科があったら有効か何か御意見ございますでしょうか。

委員

僕が言うとうとうしても偏ってしまうんですね。せつかく委員の皆さんが来られているので、それこそ課題にさせていただいて、「こういう分野をみんなが教わるんだ」とか「こういう分野の力をつけていく」ということを次回に御意見いただくといことではだめですか。

よろしいですか。すみません、仕切ってしまいまして。

副委員長

いえいえ。ありがとうございます。

では、次回の1つの課題として、委員の皆様にご考えてきていただいて、御意見をいただくということでもよろしいでしょうか。

御意見をいただくことは本当にいいと思います。学校時代からそういう専門性を養っていくっていうことは先につながります。それが働く場所が施設であっても、一般の企業であってもそういったスキルがあると、すぐ順応でき、ストレスなくその仕事に入れることがあります。是非、そういった点からもどういった専門学科があれば有効かについて、次回皆様から御意見をいただきたいと思ひます。

委員

ただ今出ました専門学科のところにも響くものがあるんですけども、職に特化したってところよりも、その前の段階である、例えば「人とともに働く」とか、「人と一緒に過ごす中で出てきそうなところ」に関して免疫をつけたり、クリアできたりするような教育内容があったらとてもありがたいと思ひます。

例えば、科目名で言ったら行動科学とか心理学とか社会学に近くなると思ひますが、「人が数人集まったら、なんとなく自然に手抜きが生まれる」であったり、あるいは「人には裏表がある」であったり、特にずるいとか酷い

ということではないんだけど、人間が集まると色々出てくる「そういうこともありうる」という当たり前の仕組みを、基本的なところから学べるようなものが在学中にあるとありがたいかなと思います。

子供たちが学校で出会う大人っていうのは先生で、学校の先生は割と真面目であったり、あからさまな裏表を示さなかったり、さぼらない人達であると思います。実際には意図的に力を抜いて働き続けてもらわないと、うちの子、体壊しちゃうかなっていうような真面目さがあったりします。だから、そういった「人間の自然な動き」、それから「無意識のうちに出てくる人間の弱さ」、「いい意味での適当さ」があるもんだということを学べる時間があるといいかなと思いました。

同じように体の仕組みについても、例えば、「ものすごく頑張って集中しちゃうと、普段は聞こえているはずの人の声が聞き取りにくい」とか、「普段だったらできることが、ものすごくいっぱいになると、考える力がストップしてしまう」とか、それはとても自然な働きだということが分かったり、体の仕組みに関することを覚える時間があったりすると、とてもありがたいかなと思います。

学校を出て鍛えられるというよりは、学校にいる間にそういう力を意図的に学ばせてもらいたい。もしかしたら大学の科目とかにはあるかもしれないけれども、特別支援学校に通っている子供たちは、早くからそういうことをきちんと学べる時間があると、とてもありがたいかなと思います。

副委員長

はい。ありがとうございました。

そうですね、特別支援学校だと、どうしても守られた人間関係の中でいろいろな活動をしていくということがありますが、学校を卒業して社会に出ると、そういうわけにはなかなかいかないことが多いです。人間関係、また、コミュニケーションの取り方1つにしても、学校でやってたことがそのまま通用するといったことではなくて、いろいろな人との関係作りや対人スキルが必要になってきたりします。

また、体の仕組みについても御提案いただいた通り、学校にいる間にそういったことも学習の1つとして取り入れていただければ非常に有効ではないかとの御意見だったと思います。

ありがとうございます。

委員

スライド6番のところに、小学部で身辺処理自立について指導が行われ、それは、継続的に中学部や高等部においてもその基本はあるという風に説明が先ほどありました。でも、中学部とか高等部になってから特別支援学校に入る生徒さんも多いと思います。家庭で基本的な生活習慣を指導されていない

生徒さん、また、高等部を卒業し、就職していてもまだ自立できていない方が多く見られます。今、一般の社会人となられている方でも、いろいろ問題があるまま大人になっていたり、教えてもらう機会がない方もたくさんいらっしゃると思います。前回お話しした通りですけれども、職業専門的なことを学ぶ以前に、まず最初に生活の基本的なことをずっと継続して見ていくべきだと思います。気になる点があった生徒さんは、その都度徹底的に御家庭とも連携し、必ずそこを改善しないといけません。どんな専門的な技能が身に付いていても、生活の基本的なことができていなければ就職できないし、続いていけない。1回就職できても、続けて働き続けることは困難だと思います。

そして、保健のところですが、自分の体のことを在学中に教えてもらうことがなかなか機会がないのかもしれませんが、やはり分かるように教えていただける機会は必要です。また、性の問題については、教えてもらってないまま、分からないまま高校を卒業して私どものところに入ってきているので、こういうふうにな不安定になるのだらうと思うところが男女ともにあります。御家庭でも学校でも教えにくいいため、生徒さん自身も分からないというところがあるのでしょうか、このことはしっかりと教えておかないと、先々で大変困ると思います。私どもでは、男女別に職業指導員がその問題について、隠さずにきちんと解決できるようマンツーマンで教えるようにしています。

それから、社会の仕組みやお金について教える科目が必要です。せっかく就職してお金を稼いでも、お金をどうしたらいいのか分からず、口座に振り込まれたお金がどんどんどんどん積み上がっていくままの人や、もらった金額を数日で全部使ってしまう人もいます。お金を引き出して必要なものを計算して使うことができる能力が必要だと思います。税金や保険、年金などの基礎的な知識が必要です。それから、社会の中には悪い人がいて、詐欺にあったことがあります。同じようなケースで2回、同じ人が電話詐欺にあって、お金を見事に振り込んでしまったこともあります。また、秋田町辺りを歩いて、「可愛いお姉さんとお話ししましょう」とって連れて行かれて、大金を支払ったという人もいます。お金をしっかり管理して使えるようにしたり、だまされないように気を付けたり、どうしても難しい場合は後見人を付けたりするなど、いろいろなことが必要だと思いますので、それらについての科目が必要だと思います。

他県の例にあったように、専門の分野を選ぶ前に1年生の時にいろいろな科目を学び、2年生から選択制というのも良いアイデアだなと思いました。

以上です。

副委員長

はい、ありがとうございます。

基本的な生活習慣は働く上での基礎になりますし、「性の問題」また「社会の仕組み」についても非常に重要なことだと思っておりますので、その辺も含めて御検討いただければというふうに思います。

すみません。時間の都合で、最後の問いかけに移ります。ページでいきますと6ページ、スライド番号11になります。「障がいの種類や程度にかかわらず、様々な子供が社会参加するためには、スポーツまた文化芸術の分野では教育内容の充実が必要では」ということです。

現在、その取組が進められているとのことですが、在学中だけでなく、生涯を通じてスポーツ、芸術を楽しむことができるには、こういった工夫とか取組が必要なのか、また、障がいの重い子供さんも活躍できる新たな分野にはどのようなものが考えられるのかといった問いかけになるかと思えます。この辺につきまして、委員の皆様のお意見また御質問をいただければと思います。

いかがでしょうか。

このスポーツ、芸術活動については、本当にダイバーシティのモデルとして、広く社会に働きかけていく活動であるように思います。非常にたくさんの才能を持った生徒さんもいらっしゃると思いますし、そういう才能を教育の中で開花をさせていく、また広くスポーツ、芸術活動を社会にオープンにしていくというようなことが大事になってきます。また、将来アーティストとして活動ができれば素晴らしいことではないかなと感じております。

この辺いかがでしょうか。

委員

障がいが重度である立場から少し意見させていただきたいのですが、スポーツとか芸術活動に参加するためには、移動の問題がありますので、サポートが必ず必要になってくると思います。重度の子であってもスポーツも芸術活動もしようと思ったらできるんですけど、その場所に行くまでが難しく、やはり誰かに連れて行ってもらうようになります。学校でスポーツや芸術活動の取組があったからといって、卒業後も続けてできるかといえば、それはまた別の問題で、「親が連れて行く」、「移動支援の方が連れて行く」といったサポートがあれば続けられると思います。

ただ、学校在学中にスポーツや芸術活動を含めたいろいろな経験をするのは、すごくいいことだと思います。例えば、ボッチャであれば、ボッチャの団体と、ゴールボールであれば、開催している団体と一緒に交流試合をするとかできれば、卒業後に、「どこに行けば同じようにスポーツできるのか」が分かるし、そういう繋がり方ができれば、重度の子でも続けていけると思えます。

自閉症のある石村さんというアートの方がいます。私もその子と会って話した時に分かったのですが、やはり親がいろいろサポートされていて、あっちへ連れて行ったり、こっちへ連れて行ったり、海外でも個展を開いたりしているので海外へ連れて行ったりしているとのことでした。

ですから、活動を継続できるようなサポートについてもセットで考えていただけたらありがたいと思いました。

副委員長

はい、ありがとうございます。

そうですね。移動の問題は、仕事をする上でもそうですし、スポーツ・芸術活動をする上で最低限必要になってくる問題かと思います。学校卒業後も続けられるためには、移動を含めたサポートの充実も非常に大事になってくると思います。ありがとうございます。

委員長

今の御意見に私も大賛成です。なぜかと言うと、特別支援学校時代にいろいろな活動や経験をして、卒業するとなかなかその機会がないんです。カルチャースクールなどは、障がいのない人向けに企画・運営されているため非常に敷居が高いのです。一般のカルチャースクール・スポーツは学校時代に経験したことのない内容が多いため難しいです。学生時代に経験した活動、小さい頃にしていた活動は大人になってもやってみようかなと思うのです。

そういう前提の上で提案するのですが、特別支援学校在学中に体験、経験したスポーツや芸術活動について、卒業後も、母校で継続して行うことができ、生涯楽しめるようなシステムを作ることができないかと思います。特別支援学校が、障がいがある方の一生を通じた余暇活動を支えることができないかと思うわけです。

卒業生の余暇支援に係る教員の負担については、「大学生ボランティア」をどんどん活用していただけたらと思います。徳島県では、「徳島県ボランティアパスポート制度」というのがあります。知事さんがトップで、学生さんは緑・赤・青色のパスポートをもらって、ボランティアに取り組みます。パスポートに「スタンプ」が埋まると学長さんが表彰し、次の色のパスポートに進み、最後の青色のパスポートが埋まると知事さんの表彰を受けることができます。このような取組を徳島県が行っており、学生さんは盛んにボランティアをしたいと思っていますが、ボランティアに来てほしい側と学生さんのマッチングがうまくいっていないことも見受けられます。ということで、県教委と知事部局で連携をしまして、先ほどの話題でも出てきた「移動支援」とか「活動支援」も含めて、どんどん学生さんに特別支援学校へ入ってきていただくのはどうでしょうか。

新しい特別支援学校は、福祉施設・大学・特別支援学校がネットワークを

組んで、障がい者の生涯学習を応援する中核を担ってほしいと思いますので、よろしくをお願いします。

副委員長

はい、委員長ありがとうございます。

活動をする上での大学生のボランティアの活用というような御提案をいただきました。この辺も、つながりをつける上で大変有効な御意見だったと思います。

事務局

今回延期になりましたけれども、オリンピック、パラリンピック関係でいろいろな事業を進めている中で、一昨年からの流れを受けて去年度も、地域のスポーツクラブの人にトレーナーとして特別支援学校の体育等の授業に入っていていただき、プロの視点で運動を見直すといった取組を行いました。

その中で、地域のスポーツクラブがどの程度障がいのある方を受け入れているのかといった調査もさせてもらったりしています。決して、そんなに進んでいる状態ではないのですが、閉じているわけではなくて、「障がいのある方も来てもらえれば、受け入れたり、活動を広げていったりしたい」と考えられているスポーツクラブもたくさんあるように結果としては出ています。こういったところも地道に我々が取り組んでいかなければならないというふうには考えています。

以上でございます。

副委員長

そうですね。地域には、本当に協力したいと思っていらっしゃる団体や活動家の方は多いと思いますので、こちらからいろいろな御案内を通じて協力を求めていくことも非常に大事なことでしょうし、地域とのつながりをつくる上でもいいことだと思います。

本当はもっと御意見をいただきたいところですが、時間の都合上、申し訳ありません。

これまでで一通り今日の議題になっておりました協議ができたかと思いますが、改めまして全体を通して何か御意見がありましたら頂戴いたしたいと思います。どうでしょうか。

よろしいでしょうか。

委員の皆様、各検討事項につきまして、数多くの御意見また御提案をいただきまして本当にありがとうございました。

それでは、ここで委員長の方に進行をお返ししたいと思います。委員長、よろしくをお願いします。

委員長

副委員長さん，どうもありがとうございました。御苦勞様でした。

今日も，いろいろな分野からの活発な御意見をいただきました。また，次の委員会に向けて，「専門学科」について検討する必要があるとの御提案もいただきました。

どのような「専門学科」の設置が良いのかということにつきましては，みなと高等学園や阿南支援学校が「専門学科」を設置しておりますので，ホームページ等で御確認いただいて，どういう学科を設置しているのかを参考にしていただけたらと思います。新しい特別支援学校に必要であれば，2つの特別支援学校と同じ学科でも良いと思います。

委員の皆様には，本日は，本当に御協力をいただきありがとうございました。

それでは，事務局へお返しします。